みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.89

ひと言　子どもの時間

安達喜美子（センター運営委員）

保育園年長児のKくんは、みんなが機織り機で毛糸のクリスマスブーツを作っている傍ら、毛糸で蜘蛛の巣を作り壁に貼り付けていました。Kくんの関心は今、散歩先で出会う蜘蛛とその蜘蛛の巣の姿の不思議でいっぱいなのです。でも、仲間の真剣な様子は心に響いているようで、皆と同じ作業は難しくても「毛糸の時間」は共に過ごしているのです。Kくんの心動くものの世界を一緒に感じながら、保育士はそばに付き添います。

今年の秋の運動会で年長児たちは、『荒馬』を踊りました。たくさんの大人たちが見守る中に踏み出していくことはしなかったKくん。でも、太鼓をたたく保育士のそばで、自分の太鼓のばちを握っていました。踊り終わった仲間たちは、誰からともなくKくんのそばに自分の椅子を移動させて座ってKくんに話しかけていました。

ルソーは『エミール』の中で「子どものうちに子どもの時期を熟させるがいい」と言っています。子どもは決して大人を小さくしたものではなく、子どもの時代にふさわしい生活を精一杯生きることが子どもの固有の権利である、と。

喧しい効率主義とは無縁の、子どもの時代にふさわしい子どもの時間が保障されることこそ！　今は強くそのことを思います。

目次

ひと言　安達喜美子　1

対談　子どもの命を原点に今日の教育課題を問う
～最近のいじめ問題と大震災問題をめぐって～
中森　孜郎　数見　隆生　2

教育時評
教育論なき働き方改革　神谷　拓　11

3・11から6年　青年たちは今
未来を拓く　藤岡しほり　12
震災と私　小山　綾　15
Fプロジェクト活動に参加して　阿部　花映　17

わたしの出会った先生 20
私たちの礎、久保健先生　渡辺　孝之　19

子どもと学校
縦の糸と横の糸 ～「金曜日の作文」を通して～　千葉　早苗　20

相談センター報告　第11回
「切り絵」制作を通して　さとうゆきこ　22

おすすめ映画
スターウォーズの対極にある
これもアメリカ映画「ネブラスカ」
加藤　修二　24

センターの動き　24

題字：江島　隆二　表紙写真提供：藤岡しほり

対談

子どもの命を原点に今日の教育課題を問う

～最近のいじめ問題と大震災被災をめぐって～

中森　孜郎（前・代表運営委員）　×　数見　隆生（現・代表運営委員）

1．いじめ自殺の問題をどう考えるか

数見　近年、不登校で苦しんでいる多くの子どもがいたり、いじめで自死にまで追い込まれるという深刻な問題が生じています。また震災では大川小学校のように学校管理下でたくさんの子どもの命が失われました。こうした子どもの尊い命や人間の発達に関わる深刻な問題が頻繁に起こっています。この状況は、今の社会で生じていることですが、少なからず学校と関わって起こっていることです。では今の学校・教育にどんな課題があり、何が切実に求められているのか、この辺の問題について二人で話し合いたいと思います。

まずは、いじめの問題を中心にしながら、今の学校・教育の課題を検討したいと思います。前88号では、いじめをテーマに現職の先生方の座談会を掲載していますが、今回はその背景に何があり何が原因で、こんな問題が多発してきたのか。いじめは昔もあったと言われたりしますが、今では命に関わる深刻な問題になっています。学校は本来子どもの命を原点に、人間としての発達支援をする場なのに、その学校で子どもが死にまで追いこまれている。この実態をどう考えればいいのか、まずはその問題を軸に考えていきたいと思います。この状況を中森先生はどう考えているのか、そのことをまず話していただければと思うのですが……。

いじめ問題が起こる背景と教育・学校の歪み

中森　いじめや自殺の問題は、これまで事件が発生するたびに対策が講じられてきましたが全然なくならない。かえってひどくなっているように思います。この問題は子ども自身に問題があるというよりも、今の学校教育そのものに大きな原因があるんじゃないかというのが、私が結論的に考えていることです。

歴史的に、いじめ問題がいつ頃から出てきたのかということを考えると、戦後、教育基本法ができて新しい民主的な教育が発足するわけですが、50年代後半になると国家統制が強まり、60年代には高度経済成長政策の一環として人づくり政策がとられ、「全国学力テスト」が実施され、受験競争が激化してきます。その中

でまず出てきたのが70年代の「落ちこぼれ」問題でした。そして80年代の中曽根内閣の頃から「校内暴力」、いじめ、自殺、不登校など様々な問題が一挙に吹き出してきたのです。

要するに、戦後に出発した民主教育の基本からは大きくずれてきて、学力テスト中心の詰め込み教育が一気に進みました。その過程で、子どもが主体的に学ぶという教育が薄れ、財界の求める人材養成のための教育になっていったのです。さらに90年代になるとソ連が崩壊し、世界中の経済競争が一層激化する中で、それまでの「受験優等生」では役に立たないということで、「ゆとり教育」や「生きる力」という方向が出ましたが、それもつかの間、第一次安倍内閣になってから「学力テスト」が復活し、それ以来「全国学力テスト」を中心とする教育体制が強化されました。本来学ぶ主体であるべき子どもを、財界の求める人材を効率的に養成する方針が出され、子どもたちを競わせる存在にしてしまいました。そうした状況のもとで、学校から自由の空気が奪われ、子どもたちは息苦しくなり、その吐け口を求めるということになりました。いじめ問題というのは、学校に限らず、閉塞された社会の中では必ず起こってくる現象なんですが、学校にもそういう陰湿な状況が急速に広がっていったのです。

数見　学校の中にもいじめの冷床が作られてきて、その背景に歴史社会的な政策がらみの問題があり、学校が本来の人間を育てるという機能を失って、学力テストという競争の場に追い込まれ、人間関係を歪ませてきたのでないかということですね。

そうした背景認識は私もほぼ同様に感じていますが、今、学校が若者に生きる展望を育てる場になっていないその最たる事件が、ごく最近発生した座間市での9人の若者の殺人事件ではないでしょうか。死にたい、生きていたくないと発信する若者が増えてきている状況の中で、同じように生きる価値を見失い自暴自棄になった青年が、死の介助人という名目で何人もの殺人事件をやってのける異常事態が発生しました。これは今日的な文化的社会が生み出した問題であると同時に、学校や教育が歯止めになっていないという問題でもあります。学校が人間の価値観とか、生きる展望を育てる場になっていないと言えますが、こうした命に関わる事件が頻繁に起こってきています。90年代になり文科省も「生きる力」の目標を掲げ始めたけれども、実態はその後も一層人間としての生きる力の弱化、深刻化が進行してきたように思います。

中森　先程はいじめを発生させる側の問題として話したけれど、そのことはいじめられて自殺する子どもの側の課題にもなるかと思います。つまり、それらは教育的課題からすると同質の問題のように思います。学校教育の中で学ぶ楽しさとか、その中でどう生きて行けばいいかということを考えたりするような機会が奪われているのです。学校が目先の進学の問題だけとなり、人間としてどう生きていけばいいかという問題や、学ぶことの本当の楽しさとか、そういう大事な課題を体験しないために、生きる希望につながらない状況になっていると思いますね。だからいじめる側にとってもいじめられる側にとっても、その弱点や不協和現象としてそうした問題が出てくるんです。一緒に学んで本当はどうなの、どうしてそうなの、とみんなで意見を出しあって、発見し喜びを共有する学び体験がなされていない。競争だけで孤立させられ他者を否定するような教育では人間関係を歪めてしまうのです。

いま学校が人間を育てる場になっているか？

数見　最近の教育現場は以前に比べかなり硬直化してきている状況を感じますね。１９８０年ぐらいまでは現場の先生たちの創造的な実践的取り組みは結構活発だったし、教育に関わる大学等の研究者も政策的な動向に対峙し、批判的見解を積極的に提示したり、優れた教育実践を現場教師と一緒になって創造し教育の質を変えていこうとする勢いが結構ありました。そういう中で、一時期80年代以降には国も「ゆとり教育」の必要とか「生きる力」を育むための「総合的学習の時間」を打ち出したりする状況も生まれたりしました。

中森先生が附属小学校の校長をしていた70年代は、まだカリキュラムにも自由や余裕があり、自由裁量の時間とか「白枠の時間」というのがあって、かなり実践的な取り組みをしていましたね。宮城教育大学でも島小の斉藤喜博氏を連れて来たり、学長の林竹二氏が全国各地で授業をしたりという創造的な雰囲気がありました。先生のいた附属小では麦を栽培しパン作りまでの実践をするとか、今も続いている全校合唱を始め、子どもたち全員の心を響き合わせるというような様々な取り組みをされました。

その後そうした創造的取り組みは激減したように思います。全国的にも学力主義一辺倒になり、最近では「スタンダード」という言葉が盛んに使われて、一律の教育や生活指導が推し進められてきているようです。教育内容や方法の一律化だけでなく、生活指導面でも「生活スタンダード」として礼儀とか挨拶、服装、掃除、給食とかの一律化が推し進められ、教師の創造的な取り組みが大変しづらくなっていると聞きます。また保健室では、保健室に駆け込む子に「甘やかすな」「居心地良くするな」という指摘が教員仲間からあったり、寛容さは不要という「ゼロ・トレランス」の動きも起こってきているらしいです。こういう管理的な教育状況の進行の中で、居場所を失う子どもとか、生きづらさを感じ、生きる展望を見失っている子どもたちが増えているんだ、と現場の先生方の情報から感じています。

中森　それは、はっきり言えば、第一次安倍内閣ができて、そしてその時に教育基本法が変えられてしまいましたよね。あれが決定的な問題だったと思いますね。教育基本法が変えられたということは、それまでの教育の考え方とすっかり違って、国家主義的な教育に大きく転換してしまった。あの時に「学力テスト」が始まったわけでしょう。その後は、全国一斉学力テストを中心に学校教育が、教育行政も学校も全部競わされていく中で、どんどんそれが進んできたということです。ごく最近、安倍首相の所信表明演説があったけれど、その中でも「生産性革命」・「人づくり革命」という言い方をし、「人づくり革命」を経済政策の中にがっちりと位置づけ、これからの国際的な経済競争に如何に勝ち抜き日本の経済を進展させて行くか、ということを声高に主張しています。学校教育全体がテスト中心の教育にどんどん進んでしまったというのは、教育基本法がそういう考え方の下に大きく変えられたことが、転換点だったと思いますね。今、ほとんどそれについてものを言うことができない、疑問を抱かない教員が多くなる体制が出来上がった。そういう意味では、民主的な教育の大変危機的な状況に今あるかなと思っています。

子どもを取り巻く文化的状況の変容と格差社会の広がり
～生きがいを求め始める若者たち

数見　そうした政策的状況をもろにかぶってしまった背景もありますが、今の学校の中で、いじめる側といじめられる側、それを傍観している子どもが三つ巴になっている。その背景には、人間関係的なものが育てられていない、表面的な関係になってしまっている状況を感じます。学校の問題だけでなく、社会文化的な状況変化も大きいのかなと思っています。近年急激に変化、進展してきたネット社会、携帯やＳＮＳであるとかＬＩＮＥといったＩＴ社会ですね。顔をつき合わせて対面して話し合わないで、ネット世界でコミュニケーションを図ろうとする社会の問題性が、様々な誤解を生じさせ、ストレスを生み、人間関係を悪化させている側面があるように思います。そのことで恨み辛みを生じさせたり、いじめになったり、グループ対立を生じさせたりしている状況を感じます。

また、そうした文化面の問題と同時に、今日の社会格差が広がり、家庭における育ちや地域の教育力の喪失なども関係性の歪みを増幅させ、いじめ問題に絡んでいるように思うんですね。しかし、そうした状況があっても子どもを育てなければいけないのが学校なんだし、そうした時代だからこそ、子どもの人格形成にかかわる教育が大事なんだけれども、そういう観点が今の学校にきわめて弱くなってしまっているように感じるんです。そういう中

で、子どもや青年たちは生きがいを持てないで、もがいている。今、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』のマンガ版がすごく広がっていますね。子どもや若者は、生きがいの展望を持てないで、自暴自棄になったりもがいてる層も多くなっている反面、そうであってはダメだと感じ、前向きに展望や欲求をそういう書物で模索している層も増えてきているんだと希望も感じています。

中森　この『君たちはどう生きるか』の中にも、いじめの問題のストーリーがあるんですよね。自分が傍観者であったということで主人公のコペル君はえらく悩むわけね。そういう状況は、今とは違うけれども昔もあったわけです。学校教育の中で、とにかく授業の中でも部活の中でもそうだけど、その中で本当に一年に数回でも、みんなで意見を出し合って〝本当はこうなんだ〟ということをみんなで発見したという楽しさを少しでも体験すれば、ずいぶん違ってくるんだと思うんですね。かつての白川小学校なんかの実践を見てもそうだけど、あの学校では先ずいじめなんかはなかったですね。子どもたちは学校に来るのが楽しくて、楽しくてしょうがなくて、一つのことを先生と子どもたちが一緒になって追求した。あの時の子どもたちの姿というのは生き生きしていて本当にすばらしかった。

大事な教材を精選し、狙いを絞って、子どもと一緒になって教師が自分のすべてをかけて、子どもと一緒になって本当はどうなんだろうと、子どもの学習を組織していく。そういう授業を一年に何回かでも試みてみる。そうした実践をお互いに教員同士が交流し合っていくというふうになれば、そこから何か一つでも希望が出てくるんじゃないかという気がする。そういうきっかけをつくるということが今の学校と教員に求められているのかなと思ったりするんです。

子どもたちが共同で文化を探求し、獲得していく体験を
～競い合う関係ではなく、助け合い励まし合う関係を～

数見　そういう授業や学校行事での追求の楽しさ体験というのは、内面に自分の成長、人間として生きる価値や喜びのようなものが身に付く充実感があるんでしょうね。仲間と一緒に考えあい、共同の力で物事の本質的なことに気づいたり、発見したりすることで、仲間との信頼関係が生まれたり、仲間意識ができたりするんだと思うんですね。そうした積み重ねの中で、クラスの関係性が豊かになったり、学校に行くのが楽しい、ということになるわけですね。そういう人間を育てること、子どもの関係性を育てることこそが、今緊要に学校に求められているのに、学校は行政から「いじめ対策」や「いじめ予防」といった子どもチェックとか調査ばかりやらされている状況になっている、これではなかなか展望が見えてこないと思っています。

中森　体育なんかでも「逆上がり」で、できた子もいればできない子もいる。何でできないんだろうとみんなで意見を言い合って、じゃあこうしたらどうなのと手助けをしてまたやってみると。そういうふうにしてできるようになったら、みんなが手をたたいて喜ぶ。佐々木賢太郎さんの『体育の子』などの実践もそうだけど、クラスの中で一番落ちこぼれていくような子どもたちを中心にして学習を組織していくというやり方ですよね。そこから、すでにできた子どもも、自分はできたけど「そうなのか」と、教材の本質を改めて知るということがあるわけです。一人の子どもの問題をみんなで考えていく中で、発見や気づきがあり、みんなが共に育ち合っていく。するとだんだんとクラスの集団の質が変わっていく。そういう集団に育たないと、やっぱりいじめというのはなくならないんだよね。

数見　できる子もできない子もみんなで知恵を出し合って、教え合ったりアドバイスをし合いながらできるようになっていく、わかるようになっていくという集団づくりが大事なのだけれど、今は逆の意味の集団観、学力テストで競い合う集団、クラスや学校、あるいは県別のランキング競争をやっていて、どの県はワースト何番とランク付けされ、行政関係者にまで競争の意識を植え付け、それで教育現場を縛っていく。こういう競わせ方が子どもたちを

バラバラにする状況を増幅させている。

例えば、軽度な障害の子を通常学校で受け入れ一緒に学校生活を送るというインクルーシブ教育の考え方は、社会に出たら一緒に生活するのだからと共生の観点で導入されたと思うのだけれど、他方で学力競争主義の学校観が改善されない状況がそのままで、むしろそちらが支配的な状況下では、矛盾はあちこちに出てきていますよね。現場の先生たちは、その両面にあおられ衝突したり、あたふたしているようにも感じる面があります。競争主義的学校では、障害を抱えた子は丁寧に扱われなくて、忙しくなると邪魔物的扱いにされがちになってしまう。不登校の子などに対しても、一方では「チーム学校」といった言い方で、職員が力を合わせて学校復帰できるようにとしながら、現実には教職員集団がバラバラになりがちな状況下に置かれている。先生の言われる子どものための授業づくり、学校づくりということが本当にしづらい状況がもたらされ、広がっているように感じるのです。

中森　本来は、そういう障害を持った子どもたちが通常学校・普通学級に入って一緒にやるということは非常にいいことなんですよ。でもその時は、やっぱりその子の問題をみんなが一緒に考えて、一緒に育っていくという体制や授業ができないとダメなんです。ところが一方では、学力テストや進学とかでテスト中心の教育になってくると邪魔者になるわけだよね。すると保護者も自分の子ども中心の意識になってしまって、本来の教育というより、成績中心の教育を志向してしまうことになる。自分の子どものことを考えたら、他人のことより勉強をどんどんやらないと入学できないという意識ね。そういう競争原理が学校教育を支配する中では、なかなかうまく行かない。その競争原理をどう克服するかという問題、共に育ち合う関係をどうつくるかということは今日の大きな課題だね。

数見　そういう状況の中で人間を育てるという教育観がどこかへ行ってしまっている。いい学校に行かせればいいとか、成績が上がればいいとか、そっちの方向への教育観が、親だけでなく、教師もそうさせられてしまう状況が広がっている。民主的な社会というのは、すべての人たちが共に協力しながら幸せになれるような社会をめざすことなんだけれど、自己中心の自由・勝手な競争をすることと混同してしまっている状況がありますね。

ところで、先ほど出されたかつての白川小の実践のような、できるとか、わかるとか、何かを発見するとか、そういう質の教育ができなくなっている。指導要領なり一律のスタンダード以外はやってはいけないという教育にどんどん縛りがかかっているように感じる。教育の場の中の自由性というか、創造的な教育活動を行って子どもの創造性をかきたてたり主体性を育んだり、共に生きていくという協同・共生観とか、そういう人間的な質を育てる基本のところが失われてきている状況をどう立て直していくのか、いけるのかという大きな課題ですよね。

中森　だから親もそうだけど、特に教師も、やっぱりそういう教育観を持てなくさせられてきているところがあるんですよね。実際に学校の教師も厳しい評価制度になってきていて難しいのだけれど、「今日の教育の危機」を考えると、問いと答えの間があまりにも短絡的になっているという大田堯さんの言葉、クレバー〈clever〉（利口）な人間よりワイズ〈wise〉（賢明）な人間をこそ育てなければならない。子どもたちは絶えずいろんな壁にぶつかりながら長い人生を生きて行くので、常に問いを発して、それを克服していける考える力をこそ育てなければならないんです。目先のテスト中心だけに終わってしまってはダメだと思いますよね。

そういう意味では、校長をはじめとして教師も、どういう教育観を持って子どもたちの毎日の指導に当たっていくのかという、教育観が絶えず問われている問題ですよね。

子どもの命の尊厳とその成長を願う教育観を

数見　だから、命の問題とかを考えると、戦後まもなくの綴り方の教育実践、例えば土田茂範の『村の一年生』の中にあったように、

子どもの命というのは、学級経営の柱に入っている必要があるわけですよね。命やその根源であるからだを大事にする子どもにするとか、人間の尊厳や人権的な感覚を育てるなどね。戦後まもなくの実践の中では体のことや命のことをしょっちゅう教師が、「どうだ、今日の具合は？」とか「ウンチしてきたか！」とか、そういうことを聞いてやることが基本にありましたよね。そのような感覚がなくなってしまったように感じますよね。

中森　憲法の中で一番大事な基本的人権の最初にある「個人として尊重される」ということね。一人ひとり違う子どもに、生命・自由・幸福追求の権利が認められているわけですね。この命を損ねることなく子どもを育てるというのが、先ず学校教育の一番の原点だと思うんですよね。子どもの命、しかも一人ひとりのかけがえのない命を守り、そして個性を持った子どもたちにどう育てて行くか、さらに、そうした一人ひとりの命をつなぎ合わせながら共に生きていく命に育てていく、そういう発想が学校教育の基本にあればね、今日のようないじめの問題に対して向き合えると思うんですよね。そうした発想が欠落すると対策になってしまう。

数見　つまり、教育行政や学校教師の教育観の中に子どもの尊い命という観点がきちっとあるか、備わっているかという問題ですよね。そういう教育観の問題ではなくて、いじめがあった、非行があった、だから道徳を強化しなければならない、といった対策になってしまっているという問題ですよね。子どもの人間としての成長や発達を願うその根底のところに「いのちの思想」というものが位置づいているかどうかということですね。それは、徳目や規範を教え込めばいいという問題ではないと思うんですね。

中森　親は当然なんだけれど、教師も教育行政に関わる人間も一人ひとりの命を原点にして、自ら育とうとする、自ら学ぼうとする子どもにどう応えていくかというのが、基本姿勢でなければならないですね。ここのところが今は逆転し、将来のために今を犠牲にさせられてしまっているんですね。ルソーは『エミール』の中で、「子どものうちに子どもの時期を熟させよ」と言っているけれど、子どもにその時期その時期を精一杯生きられる状況をつくっていくことが大切ですね。

2．東日本大震災と命をめぐる問題について

子どもの命に対する学校と教師の責任

数見　次に、震災と命の問題に話を切り替えたいと思います。とりわけ大川小学校事故の問題をめぐって話し合いたいと思います。

昨年の10月に仙台地裁で一審判決があり、判決直後、原告の遺族が「子どもたちの声が届いた！」「学校・先生を断罪！」という反応を示したことで、様々な意見が挙がりました。そして、間もなく石巻市と宮城県の教委が「津波は予見できなかった。教師は子どもを守ろうとしたはず」ということで控訴に踏み切りました。

二審の判決は1月に出されることになっていますが、一審判決では被災直前の津波の「予見の有無」に焦点化されていたけれど、それでいいのかという問題があるように思います。学校管理下で73名もの尊い命を一気に失ったという、教育史上かつてない悲惨なこの事故の教訓を引き出すには、二度とこういう事故を起こさないようにするという立場で考えなければならないと思います。私としては、これだけ多くの子どもたちの尊い命が失われた事実に対し、学校、つまりその長たる校長や、その学校を管轄する行政の責任者が明確な謝罪や反省を公に表明していない、「しかたなかった」というあいまいな形のままになっているように思います。被災の数分前の判断ではなくて、「想定外が起こりうる」という立場で、どれだけ事前対応をしていたのか、という問題にこそ焦点化し、徹底究明しなければならないのだけれど、それが十分真摯になされていない問題があるように思うのです。

まず、その学校としての責任問題に対して、先生はどう考えていますか？

中森　私も、あれからかなり時間はたつけれども、学校としての責

任問題をずっと考え続けてきたんです。裁判の問題としては、その補償能力を持っている学校設置者である行政を相手として訴えるよりないんですね。その場合は、事故に至る業務上の直接的過失があったかどうかに焦点がいくので、どうしても矮小化された判断となり、勝った、負けたというようになってしまう。しかし、実際は入学した時から学校は親からの信託を受け、子どもの尊い命を預かっているんですね。なのに、その命をどうして守れなかったのか、という点に関しては裁判では十分に問われていないように思うんですね。

今回の震災では、他の多くの学校でもリスクはかなりあったのに何とか子どもの被災は免れて、大川小学校では多くの命を亡くした。だから特異な例のようにみられている面があると思うんだけれども、私はそういう見方ではなくて、今の学力向上一辺倒の教育体制の下で、起こるべくして起こった典型的な事例であり、そういう状況下で生じた不幸な事故だったと考えているんです。だから学校の責任という教育の観点から改めて考えてみる必要があると思っています。

数見　被災の事実を見てみると、学校管理下で校庭に77人の子どもが教師たちと51分間いて、最後の数分前に移動し始め、山に打ち上げられた4人の子どもを除く73名が津波に流されてしまった。この子どもたちの命の事実とまず向き合う、ということが欠けていると思うんです。素直に管理責任者側の問題としてですね。二度とこういう問題を起こさないように、反省や謝罪を前提に、教訓を誠実に引き出さねばという良心が不足しているように思っています。

中森　学校は地域の避難場所になっていたわけで、住民は被災時には学校に避難してきていたし、子どもたちも校庭にいた。ただ住民は教員よりずっと長く地域で生活していたし、避難して来ていた住民は安全だと考えていた人たちなのだから、学校としてはどうするかという独自な判断をすべきだったんだけれど、住民の意見に影響されたんではないかとも言われていますね。校長はいなかったんだけれど、やっぱり学校独自の意思決定ができなかったというのが、一つの大きな問題だと思います。やはり学校運営上の問題はそこにありますね。

子どもの命の問題が教育活動の根底に位置付づいているか

数見　確かに学校独自の判断ができなかったというのが事実としてあるんですが、その背景には、事前に想定外を考えて様々なリスク時の対応を考えていなかったという甘さと、そういう甘さをもたらす要因があったと思うんですね。例えば、ハザードマップでは学校には津波は来ないことになっていて、住民の避難場所に学校が指定されていた。つまり、そうした情報や通達が安心材料となり、想定外の意識にさせてしまった。それで対応の準備を怠らしめたといえますね。その意味では、マップ作成にかかわった防災専門家や防災関係の一般行政関係者にも責任の一端はあると思います。特に今後の他地域を含む津波防災にとっては大きな課題だと考えています。

中森　学校の責任問題に限定しても、東北地方には何度か津波が来た歴史があり、前年にはチリ沖からの津波が来ているので、想定外というのは言い訳にはならない。大川小は河口から4㎞離れていても海抜1ｍで大きな川のごく近くの立地なんだからね。しかも2日前には地震があり警報も出て、管理職間では避難に関する立ち話程度はしていたらしいのだから、その時にもしもの場合を考えて対応策を全教職員で協議し、具体的な情報収集の分担とか避難場所を徹底していれば、たぶん防げた問題だよね。他の学校では、そういう経験を活かして、情報収集や避難対応を少なからず講じていたことで、何とか難を逃れた。そのことを考えると、学校の管理運営の責任者である校長・教頭の子どもの命を信託されている意識や自覚の欠如がやはり問われるね。

数見　大川小学校にも、若干行政からの事前の指導はあったようで、震災対応マニュアルに「地震（津波）の場合」というカッコ付で津波の文字を入れたようだけれど、避難場所は「近くの広場・公園」

というような架空の文章を付していただけで、津波を想定した垂直避難の具体的な場所設定も、避難訓練もしていなかった。記載は教頭だけに任されていたようですね。

雄勝小学校の場合は、保護者のお母さんが雄勝湾の引き波の状況を見て、これは津波が来ると察知し、学校に避難を通報に来た。校長は体育館を避難場所に考えていたようだけれど、その通報で、山への獣道を通って子どもたちを避難させ助かっています。谷川小学校の場合も地元の漁師さんが、引き波を見て津波の襲来を学校に通報してくれ、それで避難がうまくいった。そうした保護者や住民と深くつながりを持っていた学校がいち早く情報をつかみ、事なきを得たということがありますね。山下二小もそうでしたよね。地域への情報無線タワーが地震で壊れ、役場の職員が4㎞離れた学校に自転車で急いで危険を通報し、その情報でかろうじて教員と子どもが駆け足で高台の役場に避難し助かった。

大川小学校には学校のすぐ隣に山林があったけれど、そこへの避難は倒木のリスクを恐れてしなかったとのことだった。過去10年間にこの学校に勤務した教員のこの山に登った経験の有無に関する検証委員会の調査もあるけれど、ほとんどの教員は山には登っていない。つまり、近くに山があり、大きな川があるのに、地域のことがあまり把握されておらず、「地域に根ざす教育」になっていなかった問題も大きかったように思います。

また、地域と学校の関係では、学校は行政の受身になっていて主体になれていない、子どもへの責任という立場に立てていないという問題もありますね。宮城県では学校が地域住民の避難場所に約70％がなっていたのだけれど、子どもがいるときに被災が生じた場合、誰が住民の避難担当をするのか、ということなども全く話し合われていないという問題も露呈しましたね。

中森　そうですね、一人ひとりのかけがえのない命を信託されている意識が、学校運営上欠けていますね。もっぱら、教育行政の上からの学力テストとかそういうことだけに意識が働いていて、子どもの命こそが教育の根底にあるんだという意識がどこかに行ってしまっている状況があるんだと思うんですね。いじめのところでも言ったけれど、教員が今の教員評価制度の下でバラバラにされてしまっている状況もこうした問題につながっていると思うんだね。

数見　学校というのは本来組織で動くことが不可欠な場ですが、今の学校の状況は、様々な要因があってなかなか組織的に動きずらい状況がありますよね。歯車がくるってしまい、本質的な取り組みがしにくいという状況がありますね。上からのトップダウン、その背景に地方行政・文部行政があり、教員個々の主体的判断がしにくくなっていますね。こういうことも子どもの命を基軸にした教育活動をしずらくしているのだと思います。

中森　裁判が上まで行って遺族側が勝訴になっても、それだけで喜べるものではない、むしろむなしさを感じると思いますね。お金の問題でなく、二度とこういう問題が起こらないように、心底からの反省と謝罪の意を述べ、今後はこういう教育をしていきます、という誓いの表明がなければ心が収まらないんだと思うんですね。この点は良心やモラルの問題ですからね。

数見　この問題を今日の大きな教育問題の一つとして考えると、子どもの命とか人間としてのまっとうな成長をはかるというようなことが教育の基軸になっていない、歪んでいるという背景問題に行き着くように思いますね。もともと教育にあった本来的な営みが大事にされないとか、大切にしにくいといった状況が震災の背後に共通してあるという課題ですね。

大川小学校の尊い子どもの命をどう教訓として生かすか

中森　大川小学校では多くの命が奪われたんだけれど、数的に多かったから大きい問題だということではない。先に話し合ったいじめで自殺した一人ひとりの子どもの命もかけがえのない問題なのであって、そういう問題がいろいろ起こりうる今日的に共通する教育状況が今広がっていることこそ大きな問題ですね。

数見　同時に、震災の問題は、これからもっと大規模な問題が発生

する可能性が、東南海地方などで指摘されています。東日本で生じた何倍もの被害が生じる可能性が、ここ30年以内に70％などと報じられています。そういう学校のための教訓として生かされなければ意味がないわけですね。そういう問題として捉えられているのか、その辺の問題を感じますね。その根幹にやはり今日の教育の質が問われなければならないし、子どもの命を軸にした教育となると、教員集団のあり方とか保護者や地域との連携のあり方も問われなければならないですよね。

中森　子どもの教育を考える場合、まず生命ありきで、子どもを主体にして生存権―発達権―学習権―教育への権利という脈絡で問うことが大事だと思いますね。憲法26条では「教育を受ける権利」と受け身になっていますが、子どもの権利条約では「the right of the child to education」（教育への子どもの一人ひとりの権利）と子どもを主体に書かれています。そうすると、大川小学校の不幸な事故の場合も、またいじめと自殺の問題も、さらに授業における落ちこぼれの問題も、その文脈でとらえなければならない。子ども自身を生命の主体にする、学びの主体に位置づける取り組みです。

それから、憲法26条の「教育を受ける権利」を受けて、その次の27条で「勤労の権利を有し、義務を負う」と社会化されていることにも注目しておく必要がある。それはなぜ学ぶのか、どう学ぶのか、そして何のために学ぶのかという問題であり、今話題になっている吉野源三郎著の『君たちはどう生きるのか』ともつながっている課題ですね。

おわりに

数見　いじめと大震災に関わった子どもの命の問題から今の教育の課題を問い直してきたんだけれど、今、子どもの命に関わる問題はその二つだけでなくもっと多様に、頻繁に生じています。自死の問題では、体罰に伴う自死や「指導死」などという奇妙な言い方がされる問題までも発生しています。また、ネットのサイトやSNSで「死にたい」「さびしい」「居場所がない」と助けを求める若者の〝叫び〟がすごく多くなっています。リストカットをする子や拒食で生きづらさを訴える子も後を絶たない状況が、現場教員から聞こえてきます。こういう問題は、単に学校だけの問題ではなく、乳幼児期からの愛着や養育問題、幼少期に群れて遊ぶというような子ども期を失っている問題、思春期という大人への峠の時期が受験に縛られ孤立化させられている状況、青年期に将来設計の展望が持ちにくい今日社会の問題など、様々な課題があることも事実です。こうしたライフステージ全般とも関わって、今日の学校教育の在り方や課題を真剣に見直していく必要があるように思います。

●教育時評

教育論なき働き方改革

～部活動に関わって～

神谷　拓

２０１７年３月に学校教育法施行規則が改正され、部活動指導員制度が始まりました。部活動指導員とは、主に部活動の技術指導を担当する学校の職員を意味します（しかし、学校の職員であっても、教員免許の取得は問われません）。この制度は、超過勤務の問題を解決するうえで、教師の数を増やすよりも、外部の人材を活用した方が効率的・効果的だという財務省の判断で設けられました。

そもそも自民党は、２０１６年以降、部活動指導者の国家資格化を提案していました。これも、先の部活動指導員制度と同様に、教員でないものを部活動指導に関わらせる仕組みです。同時に同党は、教員免許の国家免許化を提案し（教育再生実行本部・第四次提言・２０１５年）、国による学校教育への関与を強めようとしているので、部活動指導員制度や部活動指導者の国家資格化は、その試金石と見ることもできるでしょう。

これらの制度の大義名分は「教師の働き方改革」であり、２０１４年に公表されたＯＥＣＤ「国際教員指導環境調査」を一つの契機にしています。自民党・教育再生実行本部も当初は、教師に対する手当を増額することで部活動の条件整備を進めようとしてきましたが（第二次提言）、ＯＥＣＤの調査後は部活動指導者の国家資格化や、部活動指導員の推進へと舵をきっています。同様の傾向は、首相直属の教育再生実行会議にも見られ、最近では２０１７年７月から始まった中教審・初等中等教育分科会・学校における働き方改革特別部会の「緊急提言」（８月29日）や「中間まとめ（案）」（11月28日）においても、部活動指導員の推進が提案されています。

しかし、これまでの議論には、気になる点もあります。それは、そもそも部活動は何を目的とする学校の教育活動なのか、という議論が極めて不十分なことです。部活動指導員の運用方法として示された、技術指導とか大会への引率といった例示は、これまで教師が担ってきた仕事の内容を示したものであり、部活動の具体的な教育内容ではありません。中教審の議論（第３回）においても「部活動の意義が問われている」「学校で行われる部活動の度合いがどのくらいかということは、そろそろはっきりする必要がある」「部活動の範囲と目的はこれですということをきっちりともう一度周知」するといった指摘があるものの、実際には教育内容の議論が進まず、むしろ部活動は学校教育の管轄外であるという前提で話が進められています。その根拠の一つとしてあげられるのが、１９７１年に設けられた「超勤４項目」（教師に超過勤務を命じることができる４項目）ですが、それは教師の労働環境を改善するために合意された方針であり、部活動の教育的意義や教育内容をふまえて設定されたものではありません。そのこともあって、今日までに超過勤務の問題が複雑化してきたのですが、残念ながら中教審においては問題にされず、「中間まとめ」においても「部活動については、学校の業務であるものの、必ずしも教師が担わなければならない業務ではない」という曖昧な表現になっています。

確かに、教師の超過勤務は、解決すべき喫緊の課題です。しかし、子どもが学校の部活動で経験できる具体的な内容や、学校の教師だからこそ指導しうる（指導してきた）教育内容の観点を抜きにして、教師の仕事として部活動を位置づけるのか否かや、学校と地域の連携体制について議論することはできないはずです。このままでは、「教育論なき働き方改革」になる可能性があり、予断を許さない状況です。

（宮城教育大学）

未来を拓く

藤岡　しほり

今年の5月にみやぎ教育文化研究センター主催の講演会で、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんと出会いました。「私の出会った子どもたち」をテーマに、今まで訪れた国で出会った子どもの写真が大きなスクリーンに映し出され、その写真の一枚一枚や安田さんの選ぶ言葉に私の心は動かされました。その中で東日本大震災で被害を受けた陸前高田市のことも紹介されました。震災から6年が経った被災地、東北。まだまだ復興には時間が必要で、課題も多く残っています。私も何かできることはないか、そう考えていたときに、安田さんが企画した被災地3県を巡る東北スタディーツアーのことを知りました。これをきっかけに被災地を自分の目で見て、後世に伝えていきたいと思い、参加を決意しました。

私が見た被災地の今

東日本大震災から6年。被災地は今、どのような状況なのか。被災した方は今、どんな思いで過ごしているのか。私は宮城県に住んでいますが、震災による被害をあまり受けませんでしたし、被災地を自分の目で見たこともありませんでした。このツアーに参加が決まった時、自分の中で決めたテーマは〝被災地の今を伝える〟です。私が見た、被災地の今。それは想像をはるかに超え、厳しい現状に言葉を失ってしまう時もありました。しかし、それでも前を向いて、少しずつ歩き出している方々がいました。

以下は現地の方々からお聞きしたお話と、私の視点から見た被災地の今です。

■福島で

一日目は福島県南相馬市。福島県で震災の被害というと、「原発」を思い浮かべる方が多いと思います。私もそうでした。しかし、福島県内では1600人以上の方が津波により尊い命を亡くされました。

私たちは、萱浜地区にお住いの上野敬幸さんにお話を伺いました。上野さんは震災当時から、今に至るまでの歩みを、静かに、けれど力強く話してくださいました。萱浜地区は原発から30㎞圏内にあるため、自衛隊が捜索活動に入ったのは、震災から40日後で、それまでは自分たちで捜索活動をされていました。地域の方々10人で40人以上のご遺体を見つけられ、その中には、顔見知りの方も多くいらっしゃいました。やっと自衛隊の捜索が入ったと思えば、捜索は約2週間で打ち切られ、その後は再び、地域の方々だけでの捜索が続く日々。そして震災から数日後、上野さんはご自宅の裏あたりで、当時8歳だった長女・永吏可ちゃんを、ご自宅から少し離れたところでお母様の順子さんを発見されました。「子どもを助けられなかった。今でも俺は最低な親だ」上野さんは、そうはっきりとおっしゃいました。当時3歳だった長男・倖太郎くんとお父様の喜久蔵さんは今も見つかっていません。

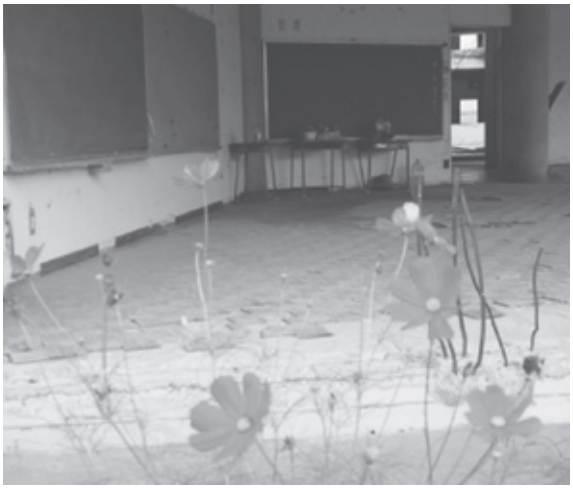
子どもを守れなかった後悔や責任、それは私たちには計り知れないものだと思います。上野さんは、さらに続けて「生きたいとは思わない。だからと言って、死にたいわけでもない。ただ、この命は倖太郎が繋いでくれた命だと思う。だから、生きているうちはやれることを精一杯やろうと思う」と話されました。私は、上野さんや地域の方々はゆっくりと着実に、前を向いているように感じました。『福興浜団』を立ち上げ、6年経った今も、ボランティアの方と捜索活動を続け、8月には追悼の花火大会を企画し、そこには笑顔の花がたくさん咲いています。まだまだ先は長いかもしれない。震災前のように、すべての人がこの町に帰ってくることは難しいかもしれない。けれど、少しずつ、少しずつ前に進んでいるこの町を、私はずっと見守っていきたいと思いました。上野さんは最後に、「東北のことは忘れてもいい。こんな悲しいことなんて忘れていい。ただ、震災から得た教訓だけは忘れないでほしい」とおっしゃいました。

命と向き合い、今ある命を守ること。単純なことに思えるかもしれませんが、これが何より大切だということを、上野さんは教えて下さい

ました。

■宮城で

二日目は宮城県石巻市大川小学校。この小学校では、児童78名中、74名が、教員11名中10名が、津波によって命を失いました。むき出しになった黒板、児童が使っていたであろう机。それらは、あの日起きたことを物語っていました。私が最初にシャッターをきったのは、子どもたちの絵が描かれている石垣でした。しかしそれは、津波によって一部が破壊されていて、津波の被害を象徴するものでもありました。その石垣には「未来を拓く」と書いてありました。これは大川小学校の校歌のタイトルです。子どもたちに待っていたはずの明るい未来、津波はその未来を一瞬にして奪いました。あの日、津波がくる前に、児童が「裏山に逃げようよ!」と、教員に言っていたという証言もあります。もう少し早く判断していれば。そう思うご遺族の深い悲しみはこれからも癒えることはないでしょう。私たちができることは、その深い悲しみに、そっと寄り添うこと。たったそれだけかもしれません。



愛の反対は憎しみでもなく、妬みでもなく、無関心なことです。訪れて感じたこと、思ったことを周囲に発信し、もう二度と子どもたちの未来が災害によって失われることがないように、しっかりと伝えていきたいと思います。

大川小学校では、もう一枚心に残っている写真があります。小学校を囲むように咲く花々です。黄色やピンクなど本当に色鮮やかな花々でした。6年半前から変わらずそこにあるものと、新しく芽生えた植物たち。そこには新しい命の姿がありました。特に印象的だったのは、校舎に向かって咲く背の高いヒマワリ。もしかしたら、子どもたちはヒマワリと背比べをしたり、花を摘んで冠を作って遊んでいたのかもしれません。子どもたちの元気な姿が思い浮かび、見えないけれど、その写真の中には確かに人の影がありました。まさに生を感じる写真でした。

私はなぜもっと早くここに来なかったのかと思いました。来ようと思えば来れる距離なのに、なぜ来なかったのか。その思いを打ち明けた時、安田さんはこうおっしゃいました。「私にも同じような経験がある。でもその時、先輩のジャーナリストの方はね、『確かに遅かった。でも遅すぎることはない』って言ったの」と。過去に起きてしまったことを変えることはできませんが、そこから学ぶことはできます。

大川小学校を離れ、次に向かったのは南三陸町防災庁舎と〝さんさん商店街〟です。さんさん商店街は、子どもからおじいちゃんおばあちゃんまで、多くの方でにぎわっていました。少し奥に進むと、防災庁舎が見えました。防災庁舎は、周りのかさ上げ工事が進んでいるため、へこんだ土地に建っているように見えました。この防災庁舎は震災遺構として残すことになりましたが、様々な意見が交わされました。43人が犠牲となった防災庁舎は、ご遺族の方にとっては辛く悲しい思いの象徴です。どうして辛い記憶を形として残さなければならないのか。そう思うのは当然だと思います。しかし一方では、震災を後世に伝えるために、形として残すことは必要なことである、という意見もありました。

最終的に残すことに決まりましたが、そうであれば、伝える手段の一つとしてしっかりと役割を果たしてほしいと思います。

何もなかったところに商店街ができ、人が集まり、賑わいを取り戻しつつある南三陸町。しかし、そこには家族、友人を亡くした悲しみを抱えた方が多くいらっしゃいます。そのような方々が笑顔でまたこの町に集い、活気のある街に戻ってほしい、そう願いながら、この地をあとにしました。

■岩手で

二日目の午後には、陸前高田市で語り部の活動を行っている釘子明さんと、菜津紀さんの著書、〝それでも、海へ〟のじいちゃんこと菅野修一さんと、その奥様のお話を伺いました。

釘子さんのご自宅は津波で流され、今はかさ上げ工事が進み、ずっと住んできたご自宅はもう、土に埋まってしまいました。今は高台にお

住まいですが、それは苦渋の決断でした。家族との思い出のある家が跡形もなく消え、埋まってしまったのです。今、お住まいになっているご自宅からは、元あったご自宅が見えます。釘子さんはそれを見た時、「語り部をやらないといけない、きっとこれは俺の使命だ」と思ったそうです。

私たちは道の駅として栄えていたタピック45という建物に向かいました。このあたりは曲松と呼ばれ、1960年のチリ地震で津波の被害を受けた地域です。当時小学生だった釘子さんは「この海沿いには家なんて建てるもんじゃない」とおばあさんから聞いていたそうです。しかし、時が進むとともに、家が建ち、町がつくられました。津波で大きな被害があったということが、忘れられてしまったのです。だからまた被害が生まれてしまいました。「過去に何が起きたかを知ることは命を救うことにつながる」ご自身の経験から、釘子さんはそうおっしゃいました。

タピック45をあとにし、私たちは釘子さんのご自宅が見えるところへ移動しました。そこは18mの高さがありました。しかし、そこにあるフェンスは大きく曲がっていました。なぜかというと、私たちがいる近くには気仙川という川があり、地震が起きた時、気仙川は増水し、津波と合流し、渦を巻き、波はさらに高くなったのです。18mとは沿岸部の津波最高到達点より高いのです。自分の住む地域の標高や地形をもっと理解して備えていれば、助かった命があったかもしれません。やはり、日頃からの防災意識がいざという時の一番の助けになるのです。ご自身の辛い経験を隠すことなく、ありのままに話して下さいました。「このツアーに参加して、被災地を訪れたからには伝える責任がある」釘子さんがおっしゃったその言葉がずっと心に残っています。過去の悲しみを未来の希望へと変えていく思いを強くしました。

菅野さんは「もし災害が起こったら、その場、その時で自分にできることをやるべきだ」と繰り返しお話しされました。得意、不得意は人それぞれだから、自分ができることをやる。一緒に生活する人同士で協力して、役割分担をする。どこか、学校のクラスに似ているな、と思いました。実際の避難所生活を伺うと、それは想像をはるかに超え、衝撃の連続でした。食料が足りない。水が足りない。一人ひとりのスペースが狭い。問題が山積みの避難所の様子は、現地に行ってお話を聞かなければ、こんなにも大変だなんて、きっと分からないままでした。

もう一つ教えてくださったことがあります。それは、災害が起きて地域の人々が避難所に集まった時は、日頃からの地域のつながりが大切になる、ということです。震災当時、地域でお祭りがあったところは、復興が早かったそうです。年に何度か、みんなが顔を合わせる機会があったり、日ごろから隣近所でのつながりがあれば、いざ災害が起きた時、「あの人は介護の資格を持っているから、年配の方のケアを頼もう。あの人は調理師をしているから調理を担当してもらおう」というような、具体的な避難所での運営計画が立てられます。改めて、自分の地域のつながりを再確認するきっかけになりました。今、菅野さんはお孫さんのしゅっぺくん（修平くん・小学3年生）に漁を教えているそうです。「学校なんて休んでいい。学校では教えられないことを俺が教えるんだ」そう笑顔でおっしゃる姿に、お孫さんへの愛情を感じました。震災を乗り越えた陸前高田の方々の強さ、温かさ、優しさを感じられる時間でした。

三日目に訪れた高田町にはたくさんの笑顔と威勢のいいかけ声が飛び交っていました。みんなの中心にあるのは様々な飾りを身にまとった大きな山車。この日はお囃子部隊と曳き手が山車とともに町を練り歩きます。活気にあふれたこの町。しかし、高田町内は津波によって大きな被害を受けました。23世帯中残ったのはたったの1世帯。お祭りに参加しているほとんどの方は津波でご家族を亡くされたり、ご自宅が流されたりと、大きな被害を受けました。うごく七夕の山車もほとんど流され、一時は存続の危

機に陥ってしまいました。でも、たくさんの方の支援と地域の方々が一丸となり、なんとかもとの形を取り戻しました。山車は復活しましたが、少し目を外に向けると、広範囲にわたりかさ上げ工事が行われ、更地には重機が目立ち、高田町はまだまだ復興の途中です。〝避難所〟と大きく書かれた看板を見ると、ここには津波が来たんだ、多くの方が亡くなったんだ、とふと気付かされます。私たちは、川原祭り組にお邪魔させていただきました。川原祭り組の皆さんは仲間のことを〝かわんちゅ〟と呼んでます。私たち高校生も、かわんちゅの一人として、うごく七夕祭りに参加しました。山車は12地区ごと趣向をこらし、とても華やかでした。山車には梶棒という、方向転換するための長い棒がついてます。主に男性がその棒を持ち、左右に動かします。動かす人は山車の後ろと前に分かれているので、息を合わせないと山車は動きません。動かしている様子を見ていると、かなり力がいるように思えました。全員で一緒に力を加え、それにより少しずつ、ゆっくりと進む山車。それは、これからのこの町の復興を象徴しているような、そんな気がしました。

祭りの中での子どもたちの笑顔は、その場を明るくする不思議なパワーを持ってるなと思いました。きっとこの町の未来は明るい。子どもたちの姿を見て、そう思いました。

夜になると雰囲気がガラッと変わり、山車もライトアップされ、とても幻想的でした。お囃子部隊は女性も男性もさらしを巻き、真剣な表情。一年に一度のこのお祭りへの強い思いがひしひしと伝わってきました。山車が動き始めると、見ている人も一緒に歩き始めます。その中にはお囃子部隊や、梶棒の皆さんのご家族もいらっしゃいました。お父さんを見つめる子ども、息子を見つめるおばあさん、いろいろな思いが詰まったお祭りだなと改めて思いました。参加している方の中には、高田町に住んでいない方もいます。東京からたまたま来た方、学生ボランティアという方、県外から毎年このお祭りにだけは参加するという方。地元の方と、そうでない方。そこには全く壁などなく、この日はみんな、かわんちゅの一人でした。「このお祭りは、ご先祖の魂が迷わないように、私たちはここにいるよって示すために行うお祭りなんだよ」と教えてくれた安田菜津紀さんの言葉を思い出しました。そしてこれからも、高田町のみなさんの復興への歩みを見守ってくれるでしょう。

最後に

自分の命、愛する人の命、それらを本気で考え、生きていくうえで大切なことをたくさん学んだ4日間。今、これを書いているときも被災地で出会った方々の顔、声、仕草の一つひとつが頭に浮かんできます。被災地はまだ悲しみに包まれていました。しかし、私はその中に希望の光が差し込んでいたのを自分の目でしっかりと見ました。復興は確かに、少しずつ進んでいます。これからの道のりは長くても、きっと大丈夫。無責任な発言かもしれませんが、私が出会った方々を見て、そう思いました。

〝伝える〟ということは時には大きなリスクを伴います。しかし、私は自分の視点から自分なりに伝えていきたいと思います。私なんかでは伝えられないこともたくさんある。でも、私にしか伝えられないこともきっとある。自分の経験を自分のものだけにせず、家族、友達と共有し、一人でも多くの人にこの経験を届けます。

（聖ウルスラ学院英智高校）

震災と私

小山　綾

2011年3月11日、私が小学校6年生の時に東日本大震災が起こり、現在私は震災の経験を語り継ぐ活動をしています。高校2年生から始めた語り部活動は、今の私とこれからの私に大きく関わっています。しかし語り部活動は、当初、私にとって苦痛なものでした。

＊　＊

私が高校2年生の時に、野蒜小学校の同級生から「震災の体験を話す機会があるから一緒に試してみないか」と誘われました。最初、私はその誘いを断ろうと考えていました。東日本大震災の時、野蒜小学校で被災した人は体育館

に居た人が多く、新聞やテレビなどでもその悲惨な状況が多く語られていました。指定避難場所だった小学校の体育館には地震の直後から小学生や地域の方々がたくさん避難していましたが、津波はその体育館にまで押し寄せたため多くの方が亡くなりました。

しかし私は津波到達の数秒前に校舎に避難することができたため、体育館で被災しませんでした。家も地震の被害だけで済み、身内で亡くなった人もいませんでした。そのため自分は経験が軽い、自分は被災していないと考え、同級生や地域の方々よりも大きな被害を受けていないという事実を後ろめたく思っていました。

仲の良い友達や同級生が震災で大きな被害を受けた中、被災経験の軽い自分が経験を話してはいけないのではないか、話すことにより誰かが傷つくのではないかと思っていました。

＊　＊

友達に誘われたからという理由で始めた語り部でしたが、語り部の中でも私だけが校舎の中で被災し、家も無事でした。そのことが私の中で重荷となり、「自分は他のメンバーより被災してないから」と、勝手に自分で壁を作っていました。しかし、もう一度、もう一度と繰り返していく度に、私の中で「語り部をする意味」が生まれました。

野蒜小学校で当時被災した人の大半が体育館で被災し、校舎に逃げ込んだ人は多くはありませんでした。そのため、メディアに取り上げられるのは野蒜小学校の体育館の状況だけでした。しかし野蒜小学校で被災したのは体育館にいた人だけではありません。私は「校舎に居た人も、様々な体験や活動をしていた。その事を伝えられるのは今、自分しかいないのではないか。」と思い始めました。自分が語り継がなければ、野蒜小学校の校舎で起こった出来事を語れる人がいなくなってしまうと考えるようになりました。自分の中でマイナスに感じてきた「校舎で被災した」という事実を、発想を変えてプラスに考えることができるようになったのです。

「語り部をする意味」を見出してからは積極的に語り部に参加できるようになりました。

語り部活動を始めた頃は、旧野蒜小学校の校庭や、旧野蒜駅など、現地で行うのがほとんどでした。しかし２０１６年1月に私は初めて現地を離れ、滋賀県での出張講演を行いました。普段使っている小学校の現場から離れて語り部を行うというのは私たちの語り部グループでは初めての試みです。

現地でない所でどのように語り部活動を行うか、それが大きな課題になりました。旧野蒜小学校自体を語りのツールとして使用し、聞き手に話が分かりやすいように工夫しながら語り部を現地で行ってきました。実際に津波の被害を受けた小学校や駅舎などを目で見て、そして私たちの話を聞いて現実感を持ってもらいたい、そう思っていました。そのため、初めて県外で講話をする私は話に使うツールにすごく悩みました。

＊　＊

話に必要なツールをどうしようか悩んでいたところ、旧野蒜駅に設置してあった写真を思い出しました。旧野蒜駅には震災の記録として当時の写真を展示していました。それを思い出し、写真を使って話を進めようと考えました。

当時の写真や、今の野蒜の写真、そして過去の野蒜の写真なども探して話のツールを作りました。さらに、震災前の野蒜小学校をより詳しく伝えるために卒業アルバムや、小学六年生の時に同級生が作った当時の野蒜にあったお店を紹介する手作りのマップを使いました。話の内容に合わせながら写真を使い、会場の人全員に見えるように卒業アルバムを持って会場を歩いたりしました。さらに、まだ復興は続いているということを伝えるために、街灯がなく暗い夜道の写真を実際に会場の照明を消して、聞き手によりリアルに、そして体感してもらえるよう工夫しました。

＊　＊

初の滋賀での講演が無事に成功したことにより、徐々に現地ガイドだけではなく、一度現地ガイドを聞きに来てくれた人が県外でもやってほしいとオファーをくださることも多くなりました。今ではメンバーで分担しながら北海道、東京、名古屋、熊本など現地ガイド以上に県外へ出張に行く機会が多くなりました。

＊　＊

小学校からオファーをいただくこともあります。東京都大田区にある小学校で防災教室の講師として呼ばれたり、佐賀県の学校では小学生と中学生に対して講話を行いました。普段現地ガイドを聞きに来てくださる方は、高校生から大人の方が多いので、小学生に対して語り部を行うのは少し戸惑いもありました。

話し方や話すスピード、児童たちが話に入り込めるようにクイズを出すなど、様々な工夫を考えました。今では小学一年生の児童にも語り部を行う自信がつき、小学校教師と幼稚園教諭

を目指している私にはとても貴重で、自分自身も学べる機会となりました。

＊　＊

東日本大震災、それは私たちにとって忘れてはいけない出来事だと思います。震災の時におこった様々な失敗を繰り返さないためにも、私は語り部という形で震災の出来事を語り継いでいます。震災は私たちに大きな心の傷を与え、故郷を奪いました。つらく悲しい出来事が多い震災ですが、私はマイナスな要素が大きいからこそ、そこにプラスの何かを探し出すべきなのではないかと考えます。震災の中にもプラスの面を見つけることによって、そこから復興、防災に繋げていくべきではないでしょうか。

そう思い私は、震災の記憶と、私自身の震災の記憶の風化を防ぎ、語ることの大切さ、意義を意識しながら語り部活動を行っています。私たちが当時の記憶、体験を語ること自体が防災であり、次の災害に役立ててもらうきっかけになると考えています。

＊　＊

被災経験が軽く、周りに申し訳ないということばかり気にして、視野が狭くなっていた私が今、たくさんの人の前で自分の経験を語り、日本各地で話ができるようになりました。そう私が変わることができたのは、自分の重荷になっていたことを口に出して語るということでした。私にとって震災はつらく悲しい反面、私に様々な視点から物事を考えるということを教えてくれました。悲しいだけで終わらせず、そこからどう一歩踏み出すのかを考え、これからも活動を続けていきます。

（東北福祉大学）

Fプロジェクト活動に参加して

阿部花映

■Fプロジェクトへの参加

1年生の時、震災をテーマにした総合学習が終わったあと、瀬成田先生が震災学習を発展させた活動を提案してくださいました。震災学習をしている時、心の中で何かやりたいなあと思っていたので、ちょうどピッタリの話でした。その時に挑戦してみようと思ったのが、プロジェクトに参加したきっかけです。

私より被害が大きい人がたくさんいると思うと、中学生でもできること、あるいは中学生でなければできないこともあると思いました。部活動もあったけど、Fプロジェクト活動はぜひやりたいと思い、いろんな活動に参加しました。Fプロジェクトというのは、ふるさと・復興・フューチャーの頭文字Fをとって名付けたものです。

■地域の中で自分たちの役割と中学生だからできること

大人の人がすごくうまく歌を歌っても元気にはなるのですが、中学生が下手でも明るく、聴いてくださっている方に届けっという感じで歌うのが、聴いてる人たちからすれば、ほっこりして、ちょっと元気が出てくるんではないかと考えました。実際に私たちが歌うと、みんなにこにこして聴いてくださり、ありがとうと拍手してくださるので、歌ってよかったと思いました。

松ヶ浜「きずな食堂」での窓ふきボランティア活動

中学生だから、若いから、ちょっとした力仕事もお手伝いができるし、お話を聞くこともできます。私たち子どもが話を聞くことで、少

しは話しやすいということもあるのではないでしょうか。

そんなことを考えながら、完璧ではありませんが、中学生らしく、心の復興を中心にお手伝いしてきました。私たち中学生の役割は、町を明るく活気づけることだと思います。ガレキの撤去作業や仮設住宅の建設などは中学生にはできません。でも一緒に歌ったり、踊ったり、交流したりして楽しい時間を共有し、辛い心を少し軽くするお手伝いならできます。中学生らしい笑顔や元気な行動で町を明るくしていけたらと考えています。

■Fプロジェクトの活動の中で大きく変わってきた私

実は震災の時、私の家は高台にあったため被害はありませんでした。けれども女川の出島で漁師をしていたおじいちゃんが津波で亡くなりました。

Fプロに参加する前までは、自分以外の被災者のことは全然考えられなかったし、それより自分が一番辛い思いをしているんだという勝手な思いがあって、他の人に目を向けることができなかったのです。だけどFプロに参加して、もっと心の傷が深い人たちがいることを知って、自分だけが辛い思いをしているのではない、もっともっと辛い思いをしている人がいるんだということを知りました。そしてそのような人たちの力になろうと思えるようになりました。

私は自分の経験を伝えるために、去年の2月に語り部をしました。語り部をしたら、たくさんの人が自分の語ったことに対して共感してくれたので、ちょっと心が軽くなりました。

Fプロの仲間の中に、津波でお母さんとおばあさんを亡くした子がいます。私は語り部をしていたのですが、語り部をするといろいろな人に聞いてもらえて、たくさんの人が自分の語ったことに対して共感してくれるので、ちょっと心が軽くなる経験をしました。その友達は私よりもっと辛い経験をしているけど、その子からあんまり当時の体験話を聞いたことがなくて、もしかしたら一人で抱え込んでいるのではないかなと思ったときに、一緒に語り部しようと誘って、その子にも語り部をしてもらいました。話し終わったあとにホッとした様子で、安心したのか涙を流していました。今まで泣かないようにしようとしている印象があったので、ちょっとは心が軽くなったのではないかなぁと思いました。

「きずな食堂」での交流会で被災者と歌う仲間たち

■続いて欲しいFプロジェクト

震災学習とFプロ活動は、自分が震災としっかりと向き合うためのものでもありました。復興とかもあるけど、それだけでなく七ヶ浜をもっと盛り上げていきたいと考えるようになってきました。それはFプロの活動を通して、七ヶ浜にちょっと笑顔が増えたように感じたので、そういう面ではFプロはこれからもなくてはならないと思ったからです。卒業してもFプロのサポートを続けていきたい。リーダーで話し合っていたときに、七ヶ浜のためとか、復興のためにやりたいことがたくさん出てきたので、それを今後、実行していきたいと思います。できるかどうかはわからないけど、津波到達点の石碑を建てることや七ヶ浜の防災マップや模型をつくる活動もしたいねと話し合いました。高校生になったら、活動の幅もきっと広がると思うし、やりたいことも増えると思います。七ヶ浜に笑顔が増えるような活動を続けていけたらいいです。

今は1・2年生のリーダーがさっそく「きずな食堂」の企画を立てて、活動を始めています。

（七ヶ浜町立向洋中学校）

■この原稿は2017年9月11日に放送されたTBCラジオ「3・11みやぎホットライン」でのインタビューを元に起こしたものです。

わたしの出会った先生 20

私たちの礎、久保健先生

渡辺孝之

私が出会った先生の中で最も大きな影響を受けたのは久保健先生です。

先生との出会いは、私が18歳で宮城教育大学に入学した4月です。所属する陸上競技部の顧問の先生が研究室の引越しをするので「手伝いに行け。」と先輩に言われて行った先が、久保研究室でした。入学式の時は新婚旅行中で、顔を合わせたのは入学してしばらくたったその日が初めてでした。久保先生は宮教大に着任して2年目を迎え、1年目にいた狭い研究室を出て、当時宮教大の特徴だった教官と学生が共に学び生活する「合研」（合同研究室の略）を開設しようとしていました。そのための引っ越しということを荷物運びをしながら聞きました。

「合研」は教官と学生が共同生活する場なので、新設した合研は学生を募集しました。大学に入学しても狭い部室しか居場所がなく窮屈な思いをしていた私を含め陸上部1年生はこぞって「久保合研」に所属し、大学生活の華々しいスタートを切ることとなったのです。

4月のある時、久保先生が、「もうすぐ20代も終わりだな」とつぶやきました。私は即座に「10歳さば読んでるな！」と思いました。40年互いにほぼ変わらぬ風体で、今となれば年相応ですが、当時は実年齢とはかなりの差がありました。

久保先生から学んだことは、一言で言えば、学ぶことと遊ぶことの統一です。難しいことをやさしく、そして深く、面白く、という北方教師の生き方を久保先生は東北に来て実践しようとしていたと思うのですが、先生ご自身の学習の過程に私の学生生活がどっぷりとはまりました。

ですから、合研での生活は、よく遊び、よく食べ、よく飲み、よく学びで、この全てを満遍なく追求しました。自主ゼミと称して久保先生と一緒に難しい本を読み合いました。芝田進午の『人間性と人格の理論』やマイネルの『スポーツ運動学』など……。難解な言葉が並び一行を理解するのにも時間がかかりました。悩んだ私たちが先生に質問すると即座に答えます。「どうして久保先生はこんな難しいことをよく知っているのだろう」と思いました。久保先生は私が出会った人で最も「頭のいい人」でした。

学びと遊びの統一は合研のモットーです。久保先生から「ドル平」という泳法指導を学んだ私たちは、ある夏、学生向けの水泳教室の開催を企画しました。参加者募集のために、昼休み、萩朋会館の前で出し物をしながら宣伝を行い、50メートルを完泳した参加者に記念品として贈る「久保助バッジ」を徹夜して作ったり、もちろん教室が終わったら宴会をしたり……なにがメインか分からなくなるような活動ですが、のちに私たちの教育実践の糧となるものを確実に学びました。

もう一つ久保先生のすごさは、組織者であるということです。久保先生の教えを受けた教職員が宮城県内には数多くいます。私の参加する学校体育研究同志会の会員にも教え子がたくさんいます。ですが久保先生が直接誘うということはほとんどありません。本人がその気になるように誘うのです。先生ご自身が実践しているので学生もそれにつられていったのだと思います。その連鎖が幾重にも広がりたくさんの仲間が生まれました。

久保先生との出会いがなければ今の自分はないと思える、まさに恩師です。

（鳴瀬桜華小）

子どもと学校

縦の糸と横の糸

―「金曜日の作文」を通して―

千葉　早苗

今年の学級文集は、「金曜日の作文」です。全く工夫が感じられないタイトルですが、ここ数年、何年生を担任しても金曜日の最後の時間を作文の時間にしています。金曜日にしているのには、わけがあります。学校生活にどっぷりとつかった5日目なので、学校生活の関わりの中から書く題材を見つけることができるのではないか。休みを挟まないので（週末作文のように）あそこに行った、何を食べたというお出かけ作文になりにくいのではないかと考えたからです。そして、土日にゆっくり子どもの作文を読んで赤ペンを入れて、文集作りの下準備をしたいという仕事上の都合もあるからです。

今年は4年生30人の担任です。素直で明るくて、いつの間にかユーモア溢れる学級になっています。室内パーティー係として笑いの中心になっているOさん、言葉もしぐさも可愛らしくみんなをほのぼのした笑いで包み込むYさん、クラスみんなの信頼が厚い真面目なTさん、授業中は静かだけど体育では抜群の光を放つHさん。勉強熱心、説得力ある発言でみんなをうならせるRさん。30人全員のキャッチコピーをここに載せたいくらい一人一人すばらしい良さを持つ子どもたちと出会うことができました。

今年も金曜日の6時間目が作文の時間。ここでは、一週間を振り返り、心に残っていることの中から一番書きたいことを決めて、本当のことを正直に書くように話しています。書き方としては、ある日ある時のことを思い出して、したこと見たことを聞いたことをありのままに書くように伝えています。あとは、子どもたちの作文を通して何をどんなふうに書くのかを話しています。（児童名は仮名　☆は赤ペン）

そろばんから家までの出来事

さいとう　けん

ぼくは、10月19日にそろばんに行って、今度そろばんであるみちのくしゅ算競技の練習をしました。本当は計ってやるのに計んないでやりました。先生が、

「計んないでまず、練習になれろ。」

と言ったからです。ぼくは、六級でした。かけ算とわり算と暗算と見取り算をやりました。全部で６００点、ぼくは５８０点でした。ぼくは、やったと思いました。でも先生に見せたら、

「へーえ。」

と言われたので、ぼくはえーと思いました。そして手引きをしました。

一時間たってもう暗くて帰ろうとしたらとつぜん、

「けんちゃーん。」

と言われたので、後ろを見ました。でもだれもいなくてまた、

「けんちゃーん。」

と言われたので、真上を見ました。でもいなくて正面を向いたら弟とお母さんがいました。お母さんが、

「むかえに来たんだよ。」

と言ったので、それからいっしょに家まで帰りました。５８０点のことを言ったらお母さんだけ、

「すごいじゃん。」

と言ってくれたので、やっぱりぼくはうれしく思いました。

☆　お母さんは、ちゃんとけんさんのがんばりを分かって、「すごいじゃん。」とほめてくれたのですね。お母さんだけはほめてくれた、うれしい！　そのときのうれしい気持ちを素直に書けるけんさんがすばらしいなと思いました。

金曜日の作文は、お出かけしたことや行事のことでなくていいのです。みんなの生活の中から心がふるえたことを思い出して、「見たとおり」「したとおり」「聞いたとおり」「感じたとおり」素直に書いてみま

しょう。そうやって書いた文にはきっとあなたらしさが表れますよ。

反応の薄いそろばんの先生とは対照的にちゃんとほめているけんさんのお母さんがすばらしいなあと思いました。最後の3行からやっぱりお母さんはぼくの気持ちを分かってくれているというけんさんのうれしさと安心感も伝わってきます。生活の一コマを切り取って書いた子どもの作品を通して、学級みんなでその子の良さを感じ取ったり、生活のしぶりの良さを認めたり、気持ちを共感し合ったりすることができるのが文集を読み合う良さだと思います。そして子どもの作品を丁寧に読むことは、教師と子どもの縦の糸を確かなものにするのだと若い頃に先輩の先生から教えていただいたことを思い出します。

おもしろかったつり

あいざわ　しゅん

ぼくは日曜日にお父さんとつりに行きました。その日は寒かったのでお父さんは、

「外に出たくない。」

と言っていました。その時になぜかつりがしたいと思いました。そして、

「つりにいきたい。」

と言いました。そして無理やり説得して連れて行きました。そして『つりエサマリン』というところでエサを買いました。ミミズのなかまみたいな見た目をしていました。ぼくは、気持ちわるっと思いました。そしてつりをする場所に行きました。いつも行っている海はカニがつれたのでいいと思ったけど工事中なので行きませんでした。そして海が目の前にある公園に行きました。ぼくは準備に時間がかかるのでその間は、つまらないなぁと思っていました。

準備が終わってつりを始めました。最初は下に落とす作戦でいきました。ロックをはずして糸を下にたらしてつりをしました。しばらく待ってみました。待ち時間にスルメを食べていました。食べているとお父さんが、

「あ、エサ食べちゃだめだよ。」

と言っていました。ぼくは笑いました。そしてしばらく待っていると、

「ブルッ。」

と、振動が起こりました。ぼくがお父さんに聞いたら、

「小魚がいたずらをしている。」

と言っていました。海をのぞいてみると小魚が群れでお父さんのさおに近寄っていました。ぼくはまた、気持ちわるっと思いました。そしてお父さんのさおを上げると小魚はにげていきました。お父さんは、

「あせっちゃった。」

と言っていました。ぼくは小魚を取る気がなかったので、

「仕方ない。」

と言いました。そしてまた下にさおを落としました。そうしたら振動がまたきました。上げてみるとエサがなくなっていました。それを何度もくり返しました。エサがどんどん少なくなっていたので、投げる作戦にしました。そしてしばらく待って引き上げてみると、ぼくとお父さんは、

「何だこれ。」

と言いました。形も見た目もエビフライでした。海から調理された魚がつれたのかとおどろきました。（中略）

そして引き上げたらなんとハゼとさっきのエビフライのようなものがつれていたので、思わず笑ってしまいました。お父さんも笑っていました。そして帰ってハゼを揚げて食べました。美味しかったです。

夜、エビフライのようなものは何だったのか調べると、ぼくとお父さんはおどろきました。『ウミサボテン』という名前の生き物でした。ナマコのなかまと思っていたけどイソギンチャクとクラゲのなかまでした。今回のつりはものすごくわらいました。また行きたいです。

☆　お父さんとの楽しいつりの様子が伝わってきましたよ。そして何よりもお父さんとしゅんさんの会話や一緒に笑う場面から仲がいいんだなぁと感じました。ようやくつれたハゼ。美味しく食べることができてよかったね。なぞのエビフライ似の生き物の正体を調べるところがすごいと思いました。

子どもたちの作文を読んでいて気になることは、題材に友達との関わりがとても少ないことです。この学級で限られた時間の中でする私の仕事は、作文や学級文集を通して子どもと子どもを繋ぐ横の糸を見出し確かなものにしていくことだと思っています。先輩の先生はこうも言いました。まず、教師と縦の糸をしっかりと結ばないと子どもたち同士の横の糸を張れないよと。その言葉を心に置き、今日も私は子どもの作文に赤ペンを入れます。

（南小泉小）

～アゲハからの出発～

みやぎ教育相談センター
さとう　ゆきこ

■切り絵完成

この3月、昨年9月から始めた切り絵が、ようやく完成しました。

Kさんは、フクロウが枝にとまり何かを見つめる姿を、切り出しました。私は近くで採集したヤブガラシをスケッチして、切り出しました。

彼女の作品を前に、ため息が出ます。実に緻密で繊細で、そのフクロウの視線も何か意志をもつような強さがあり見事です。一緒に作った私の切り絵を並べると、情けなくなります。線の雑さとただスケッチしただけの何も語らぬヤブガラシ～。共にやってみたからこそ分かります。彼女の表現力の高さが！

私に切り絵を教えてくれたのは、Kさんです。私が「こんな切り絵を作ってみたい！　どうだろうか？　教えてくれないだろうか？」とお願いしたのです。彼女は、快く頷いてくれました。

■Kさんとの出会い

Kさんはセンターで学習していました。その相談員の一人として、私が一緒に活動することになりました。それが出会いです。

私は何かしなければとあせってばかりでした。毎週1時間から2時間の交流です。国語のようなもの、算数のような問題、社会のような内容、理科の実験のような活動～と、準備ができないと安心できない毎日でした。

「こうすれば喜んでもらえるかな～」「今回は不十分不完全不満足だったかな～」と気をもむばかり。それは、かなり思いこみの強い私の一方的な考え方だったと思います。

これでいいのだろうか～。

「階段を一段一段上る『学校のような』積み重ねを」という考えを、私自身が取り払わなければと、考えました。では、何を？　またまた悩むばかり～。

そんな時、「命の誕生」（～というと大げさですが～小さな昆虫の命ですが～）を一緒に観察するチャンスがめぐってきたのです。

■アゲハの羽化が切り絵に

私の得意なものに「アゲハの飼育」がありました。庭の山椒にアゲハが卵を産み出した頃、「Kさん、いやがらないだろうか？」と、案じながら卵や幼虫を一緒に育てることにしました。

1週目に孵化を観て、2週目に葉を食べる仕草をながめ、次には脱皮した幼虫の食欲の旺盛さに驚き～。そうしているうちに蛹になりました。

「運が良ければ、羽化に巡り会うかもしれない。自宅でどう？」

「やってみます。」と、蛹を持ち帰ってくれました。なかなか羽化に遭遇するのは、難しいことです。

ところが幸運の女神は、彼女の元で確実にほほえんでいたのでした。

7月、センターの仕事も夏休みに入ろうとする頃、Kさんは写真と小さな切り

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL０２２―２７２―４１５２

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき９時から１７時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

相談センター報告（第１１回）

「切り絵」制作を通して学ぶ

絵を手に、やってきました。それは、アゲハの羽化の写真と、それを元に下絵を描き切り絵にしたものでした。

彼女の目の前で羽化したことは、本当に驚きでした。そしてさらに感動したことは、その瞬間を刻々と写真に記録し、羽を伸ばして枝につかまっているアゲハを切り絵にしていたことでした。

切り絵がまた見事なのです。アゲハの羽の模様が細かく、体の細い繊毛の一本一本まで、実に緻密で繊細で正確で。その表現力に、脱帽です！　それが始まりでした。

■教えて！

さらに彼女が、この切り絵の力を楽しみ続けることができたら、どんな作品が仕上がるのか、期待が膨らみ、合わせてこれだけの表現力や技を、私も学びたいと考えたのです。

それから半年、こつこつと切り続けました。とにかく彼女の作業は、揺るぎないのです。仕上がりが分かっているように、ナイフを動かしてゆく～。下絵の細い鉛筆の線をそのまま残す細かい動きが、続きます。

私はと言うと、「この実は小さいけれど、どう切るか」とか、「この線、切れた～」とか、「どこ残せばいいのか?」と落ち着きなく、恥ずかしいのです。

そして、この作品の完成が、この３月となったのでした。

■仕上がった作品と

先日、作品を額に入れ、センター内に飾りました。赤い台紙に「龍が舞う」絵、クリーム色に「翼で身を包む鳥」の絵が並びました。センターで仕上げた「フクロウ」と、自宅で仕上げたものを合わせて、８作品です。

作っていた当初、彼女は、白と黒の切り絵にしたいようでしたが、18色の台紙を用意してみました。台紙をゆっくり選びました。白と黒だけでない、多彩な台紙になりました。作品８点をどう発表してゆこうか～。今それが悩みです。

■お互いに学び合う

今、こうして私はKさんから学んでいます。とても嬉しいです。

そして、私も、「次の活動は、あの実験にしよう～『おお！』と言わせてみたい！」と準備をしています。

ご案内　冬の学習会（主催：宮城民教連）　■１月６日・７日　■会場：茂庭荘

６日の午前（10時～12時）　教育講座で『センターの部屋』を開催します。

テーマ　『授業のおもしろさ・むずかしさ』

朝日新聞教育欄に、＜学校現場で広がるスタンダード＞という記事が掲載されました。「教員に授業方法を示す『授業スタンダード』、指導の統一を求める『教員スタンダード』も登場」と記し、それに対し「教師の主体性はどこにあるのか。上で決めたことを守るだけなら授業の工夫は要らなくなり、教師は成長しない」という教師の声も紹介されています。「スタンダードがあると楽だ」と考えるか、「手探りでも自分の思いを大切にしたい」と願うかで、授業は大きくかわってきます。

今回は、物語文（佐藤正夫さん）や短歌･俳句（小野寺浩之さん）の国語の授業例とチョウの成長観察（中地純さん）の理科の授業など具体的な実践を聞きながら、みんなで授業の姿を考えていきます。

おすすめ映画

スターウォーズの対極にある
これもアメリカ映画「ネブラスカ」

3年前の春に観たこの映画「ネブラスカ」はモノクロです。薄暗い画面から車の走行音が聞こえてきます。早朝。4車線の広い国道脇の小道には凍った雪が残っていて、人気のない寒々とするその光景の中を、向こうから年老いた男（ウディ）が足を滑らせながら歩いてきます。どこへ行くのでしょう。ウディは高速道路の入り口でパトカーに捕まり、物語は静かに始まります。警察署のベンチで疲れ切ったウディがうなだれているところへ息子のディビッドがやってきます。それがさえない男なのです。映画に引きつける要素0点の二人です。しかし二人の会話に耳目が引きつけられます。「ネブラスカ（2000㎞）まで歩いてくって聞いたけど……」「うん、おれの100万ドルを受け取りにさ」「どういうこと？　100万ドルって」賞金が当たりましたという受取証を手渡されて、古い手口の、インチキだと諭すディビッド。しかしウディの目は生き返ったように見開かれ、100万ドルを射止めたと譲りません。邦題に「二人の心をつなぐ旅」とおせっかいが施されています。映画は、この分からず屋で、ひどいアル中の父に心が近づいていく息子を描きます。その描き方がとても自然なのです。派手な演技なんてこれっぽっちもありません。二人は、ウディの故郷、タイトルのネブラスカ州のソーホーンに立ち寄ることになります。そこはアメリカ中部の寂れた田舎町です。100万ドルの賞金の話を聞いた親戚、幼なじみの面々は気が気でなくなります。受取証を盗まれたりお金をたかられたりしますが、ディビッドはそのトラブルを乗り越え、父と賞金を受取りに出発します。さて、その賞金は？　最後は、満面の笑みでトラックを運転するウディに続いてネブラスカの田舎道が浮かび上がり、映画は終わります。ああ、録画に鍵をかけ保存版にしよっと。

（加藤　修二）

センターの動き

〈10月〉

1日　「道徳と教育を考える」いじめ問題についての識者の論を分析。高校生公開授業案内をホームページにアップする

4日　予定が大幅に遅れ、やっとつうしん88号の校正に入る

5日　公開授業チラシのデザインが決まり印刷発注

6日　仙台市より昨年に続き公開授業の名義後援使用承認の連絡届く

13日　11回事務局会、つうしん88号他発送作業。県教委より名義後援不可の連絡。募集人数が40名と少なく全県的でないというのがその理由

14日　第2回こくご講座、参加者少ないが、二つの分科会とも内容は充実

16日　県内の高校へ公開授業の案内発送。運営委員会資料準備

18日　県南のS高校より公開授業参加希望の電話連絡が入る

19日　第2回運営委員会開催。今後の活動方針を議論。中村桂子さんの公開授業の申し込み参加届く（HPから）

23日　哲学 sirube。台風通過が心配されるの中で開催

24日　「仙台の子どもと教育をともに考える市民の会」事務局会

25日　仙台定例教育委員会傍聴（菅井）。市の学力検査の分析と対策が報告される

27日　12回事務局会。運営委員会の報告と今後の活動の具体化について議論を開始する

28日　「教育」読書会。小中高の現役教員3名、大学研究者2名、大学院生1名に市民2名、センター2名の10名参加で充実。活発な意見交換が行われる

30日　こくご講座準備会。第3回講座の内容とそれぞれのレポーターを検討

31日　高校生公開授業の協力依頼を作成し、個別に教員有志に送付する

〈11月〉

1日　春日さんとつうしん別冊の今後の方針など相談。中野さん、こくご講座のチラシ発送作業。

2日　藤岡さんより昨年に引き続き公開授業受講申し込みのメール届く

3日　みやぎ教育のつどい（1日目）

4日　みやぎ教育のつどい（2日目）

6日　河北新報阿曽記者に公開授業のレクチャー、記事掲載をお願いする

9日　昨年の樋口陽一さんの公開授業に参加してくれた高校生に案内状を送付

15日　S高校3名とK高校5名参加申込

18日　「教育」読書会。小中高の教員を中心に7名参加。「ハムスター・ホイール」化する学校～調査結果に走らされる教師たち／なぜ、全国学力・学習状況調査に参加し続けるか～教育委員会の責任と権限を話し合う

19日　「道徳と教育を考える」いじめを考える（その2）。前回に続き識者の論を分析。次回は太田先生の考察予定

20日　数見代表、中森さんとつうしん89号用の対談。

21日　「仙台の子どもと教育をともに考える市民の会」事務局会

24日　13回事務局会。藤岡さんから早々につうしん原稿入る。公開授業受講生へ連絡文書発送

25日　第3回こくご講座、若い教師の参加が多く充実した学びの場となる。

27日　哲学 sirube。テキストの19世紀の教育思想に入る。ベンサム、ミルやトルストイについて概括、なかでもトルストイの教育思想と取り組みについてはテキスト以外の資料も使いながら丁寧に読み合う

〈12月〉

2日　中村桂子　高校生公開授業　28名の高校生参加

4日　仙台市いじめ問題調査特別委員会傍聴／「3・11を考えるつどい」打合せ

6日　北村さんとつうしん89号発行打合せ

7日　ホームページ更新。12月と1月の企画予定アップ。

10日　つうしん89号、すべての原稿届く。瀬成田さんから2回目の校正入る

14日　つうしん2回目の校正。なんとか年内発行に間に合いそう

（菅井）

発行：(一財)宮城県教育会館　みやぎ教育文化研究センター　2017・12・28　発行責任者：菅井　仁
〒981-0933 仙台市青葉区柏木 1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp　e-mail:mkbkc@forestsendai.jp